町長ひとりごと ⑥⑦

斉藤 譲

大相撲名古屋場所は、大方の予想を覆して、伏兵水戸泉が平幕優勝を飾った。この場所は、横綱が不在で、しかも優勝候補と目されていた大関曙が怪我のために欠場するなど、期待を裏切り、いま一つ盛りあがりを欠いた場所となった。だが、これを補ったのが、水戸泉の健闘である。あの塩を鷲掴にして思い切り天井に撒き散らし、大向うを沸かせるパフォーマンスや巨体を利して前へ出るけれんみのない相撲は圧巻であった。それよりもなお、勝って引きあげる花道で見せる彼の笑顔は、とかく無表情を装う角界にあって、一服の清涼剤の如く爽やかで、ほっとした安堵感を与えてくれる。特に、優勝を決めた後のインタビューに応える彼のあの大きな顔は、満面に笑みを浮べ、喜びをいっぱいに表わしていた。こんな感動的な笑顔は、あまり見たことがない。底抜けに明るい顔とは、こんな顔のことをいうのだろうかと、その時思った。

▼「関取、きょうは素晴らしい顔をしていますね。」、とアナウンサーが水を向けると、彼はいかにも恥ずかしそうに、あの大きな体を小さくして、蚊のなくような声でボソボソと「顔には自信ないっすから。」とこたえたのである。これを聞いたとたんに、私は体中がうれしさで痺れてしまった。勿論このうれしさは、彼の純情な心根に感動してのことであることは言うまでもない。

四角張った大きな顔、しかもその眉間には、たぶん自動車事故の時のものと思われる傷跡も残る。おまけに体型も顔と同様に角張って、まるで仁王様のような巨漢力士である。たしかに、この姿では、当世の上面ばかり、風体一本槍の軽薄な人物評価の基準からすれば、決して一般受けはしないかもしれない。しかし、私は彼の男振りが好きだし、その顔もよく見ると、武者人形のように凛凛しくもあり、また可愛さもあると思っているのである。

水戸泉の笑顔

▼彼は五歳の時に父親を亡くし、母親の女手一つで育てられたという。角界に入ってからは、その恵まれた素質もあり〝水戸の怪童〟といわれ、将来を嘱望されていた。今日まで飛躍のチャンスが巡って来る度に、不幸にも怪我や病気によってその芽を断たれてきた。今でもその時の後遺症によって、彼の体は満身創痍の状態が続いているという。彼はこう述懐する。

「力士にとって致命傷ともいえる足に重傷を負ったとき、いよいよ今度ばかりは駄目かも知れないと思い廃業を考えて泣いた。その時、弟がもう一度頑張ってみてくれと励ましてくれたので、病院の中で松葉杖をつき、歯を食いしばって死にもの狂いで努力した。あの時、諦めないで頑張ってきて本当によかった。」

彼はいま二十九歳、間もなく三十歳を迎える。新陳代謝の激しいこの世界では、彼はもう古参の部類に入るのかもしれないが、一般社会人としてみれば未だ駆出しである。その彼が、これほどの逆境を克服して、遂に栄冠を手に納めた。この若さにして、地獄と天国を共に覗いてきたのである。

▼尤も、これだけのことなら、他にも同じような体験をした者が沢山いるかもしれない。私が彼を評価するのは、彼がこれほどの苦節をなめてきているのにも関わらず、彼の顔の表情にはそれを窺わせる一片のかげりも、一点の暗さもないことだ。明る過ぎるほど明かるいのであるが、それは決して人間としての軽さから来るものではなく、持って生まれた気質からくるものであろう。彼の応答する言葉には、軽やかな笑顔とは似ない重みを実感するのは、決して私一人ではあるまい。

人間の顔は、動物の顔とは違って、その人の人格、品格の表明だと思う。人格や品格は、神から与えられた人生の局面に、どのような精神を持って対応し、どのように精進したかによって、重厚にもなり軽薄にもなる。彼のリンカーンが、「四十歳になったら、自分の顔は、自分で責任を持て」といわれたが、今にしてつくづくとそれを思う。果して、己の顔はどうであろうかと気に懸る。所詮、今日まで歩いてきた、約五十年の道程を、今更繕ってみても詮無い話である。しかし、これから将来に向かっては、やり直しもきこうというものだ。

水戸泉よ、あなたの笑顔は、いまの日本人が久しく忘れかけている大切な笑顔だ。値千金の笑顔だ。私は、あなたのこの笑顔と優勝に、あらためて心から祝福の拍手を送ろう。